

新型農村合作医療制度 と 中国農村医療保障制度の展望

大阪経済大学経済研究科 王峰

2009.11.11 11時～12時 日本経済新聞 大阪支社

1、問題意識

- 経済成長：
内需型経済—民間消費意欲—社会保障（医療）
*参考 I
- 医療費の高騰：
（1990年～2007年 農村住民一人当たりの年間状況）
医療保健費増加：純収入の増加=2
*参考 II
- 土地政策の変化：
請負権の流転—土地集中・農民工増加—土地保障機能の喪失—農村社会保障（医療）の不可欠

参考 I 中日GDP内訳

2006年中国GDPの内訳

2006年日本GDPの内訳

出所：（左）『日本経済新聞』2006年1月3日朝刊 P24 （右）内閣府『国民経済計算』2006年度

参考 II 農村住民純収入と医療保健費の増加

出所：『中国農村統計年鑑』、『中国衛生統計年鑑』より、報告者作成

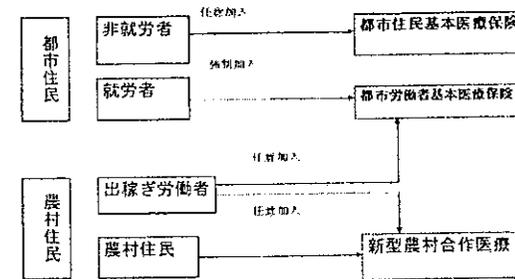
2、本報告の目的

2003年から農村医療保険制度として実施された新型農村合作医療制度の創設背景、主な仕組みと内容を紹介し、旧制度（農村合作医療制度）との比較を通じて制度の問題点と大きな課題を議論する



3、新型農村合作医療制度の位置づけ

「全民医療保障」体制の概念図

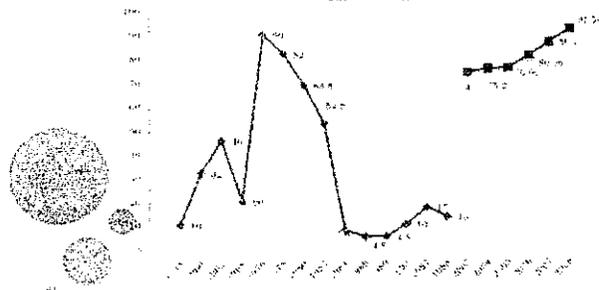


(出所) 王文亮 社会政策学会第116回大会



4、新型農村合作医療制度の展開

農村医療保険制度の加入人数

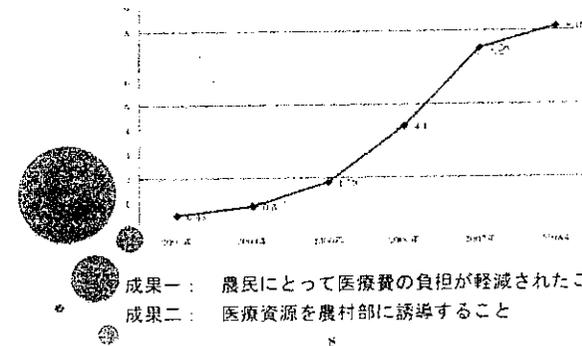


出所：中国衛生部の発表より作成

7

5、新農村合作医療制度の成果

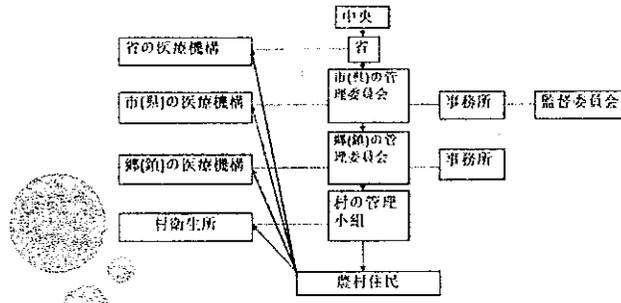
新型農村合作医療制度の加入人数 (万人)



- 成果一： 農民にとって医療費の負担が軽減されたこと
- 成果二： 医療資源を農村部に誘導すること

8

6、新型農村合作医療制度の仕組み (1)
——機構設置



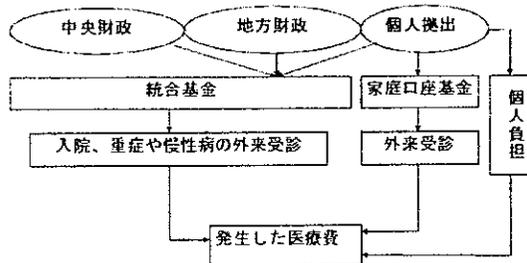
出所 農力機関等「中国における農村合作医療制度の発祥と展開」に参考、著者作成

7、新型農村合作医療制度の仕組み (2)
——主な内容

- 対象者：県内の農村住民（出稼ぎ労働者も含む）
- 家庭単位、任意加入
- 保険契約は年ごとの更新
- 重病・入院を中心とする
- 外来受診は地域によって異なっている。口座方式
免除方式
- 給付内容：入院の場合、薬剤、手術、輸血、通常検査およびベット代など
- 財源：個人拠出・中央財政・地方財政という三者負担方式
(東部 4 : 6 = 100元 中西部 2 : 4 : 4 = 50元)



8、新型農村合作医療制度の仕組み (3)
——口座方式のイメージ図



出所 報告者作成

9、新型農村合作医療制度の特徴

- 入院・重病を重視すること
- 中央政府や地方政府からの財政援助が多いこと
- 東部沿海地域と中・西部内陸地域を区別し対応すること

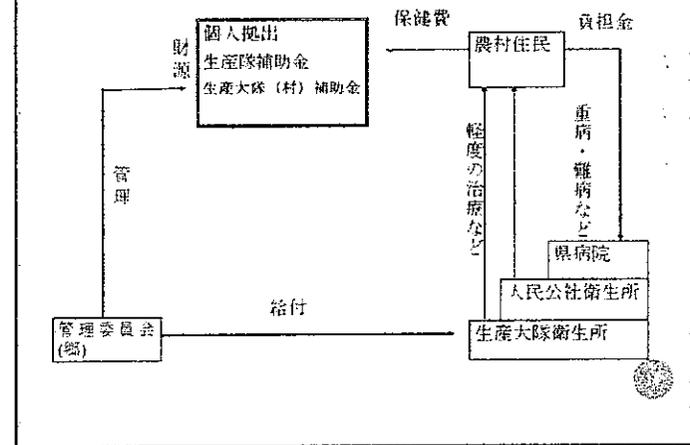


10、旧制度よりの改善点

- ・中央政府の財政援助（特に中西部）
- ・上から下への制度実施（旧制度は自発的）
- ・政府からの統一指導（横断的な組織が設立）
- ・薬剤への対応
- ・財源の限界性への克服（郷から県）



参考Ⅲ 農村合作医療制度の仕組み



11、新旧制度の比較①

－保障内容の不十分

- 旧制度の保障内容：疾病治療、子どもの予防接種、女性の産前産後の保健、計画出産、風土病の治療、飲食衛生管理、在宅ケアサービスなど包括的な医療サービス
- 新制度の保障内容：入院治療によって発生する費用を中心となる。地域によって外来受診に対応する。

対策：制度の保障内容についての充実、整備が必要となる。



12、新旧制度の比較②

－給付水準の地域格差（新制度）

医療機関の所属地域	個人拠出(元)	合作医療基金(元)	給付上限(元)	外来給付(一人当たり)
浙江省嵊州市	40	100	50000	25%免除(県レベル)
山西省臨汾市(蒲県)	10	50	30000	10元を上限
青海省西寧市(大通県)	10	54.3	25000	10元を上限

出所：2008年のデータより著者作成

対策：税金負担の増大により、東部と中西部の格差を抑える



中国農村部における医療保障の方向性

(1) 制度の充実と税金負担の増大

- ① 経済発展最好調、社会保障制度整備のチャンス
- ② 調和のとれた社会に向かい、制度の充実が不可欠
- ③ 旧制度よりの発展が望まれている



(2) 他の農村医療保障制度の重視

- ① 商業健康保険 ② 医療扶助 ③ 公衆衛生
- ④ 医療とかかわっている生育保険制度
- ⑤ 家族の扶養機能 等々

本報告の論文発表：

「中国農村医療保障制度の新しい展開 —新型農村
合作医療制度を中心に」『大阪経大論集』 大阪経
大学会、第60巻第1号 2009年5月。ご参考下さい。

ご静聴ありがとうございます。

